

(別紙 2)

論文審査の結果の要旨

氏名 前川 健一

明恵高弁（1173～1232）は、鎌倉時代の華嚴宗の僧であるが、密教と習合した独自の思想と実践を展開している。また、『夢記』の著者としても知られている。しかし、『摧邪輪』を著わして法然の浄土教と批判したところから、従来は新しい仏教運動に抵抗する保守派、体制派として否定的に見られることが多かったこと、また、さまざまな実践方法を模索して、統一がないように見えること、などの理由から、その思想内容を十分に解明する研究に乏しかった。最近になってようやく、その思想を本格的に解明しようという研究が盛んになりつつある。前川健一氏の博士学位請求論文『明恵の思想史的研究——諸実践の思想の展開とその基礎理念』は、そのような最新の動向を踏まえつつ、その難解さ故にともすれば無視されがちな明恵の教理的な著作にも分析を加え、多様な実践と思想の展開を貫くものが何であるかを解明しようとしている。

本論文は 4 部からなる。第 1 部「明恵思想の教理的枠組み」は 4 章からなり、明恵の思想の教理的な基盤が解明される。第 1、2 章では、師である文覚・景雅・聖詮らとの関係を検討し、明恵の独自性が明らかにされる。第 3 章では聞書類を中心に明恵の密教に対する見方を検討し、顕密一致説にその特徴を見出している。第 4 章では教判論に検討を加え、三論宗と法相宗の関係、顕密の関係などにその特徴が見られるとしている。第 2 部「明恵に於ける諸実践とその基礎理念」は 5 章からなり、さまざまな実践を貫く思想の核心として「人法二空」（自我も存在要素も空であるということ）の体得ということが明らかにされる。即ち、第 1 章では初期の教理的著作を分析し、第 2 章では比較的初期の『華嚴唯心義』を分析する。第 3 章では法然を批判した『摧邪輪』を分析し、特に「真如」の概念が重要であることを指摘する。さらに第 4 章では、中国華嚴受容に当り、宗密からの影響を指摘し、第 5 章では晩年の実践の中心である仏光観を人法二空という立場から見直す。続いて第 3 部「明恵の戒律観」は 2 章からなり、明恵の戒律観を取り上げている。第 1 章では、しばしば喧伝される明恵一生不犯伝説を手がかりとしながら、戒律護持が重要な意味を持ったことを明らかにし、第 2 章では、晩年の『梅尾説戒日記』を分析して、その戒律観の特徴をうかがう。最後に第 4 部「高山寺教学の展開」では、特に明恵の弟子喜海の『大乘起信論』解釈を取り上げ、明恵を継承しつつも独自性が生まれていることを指摘している。

明恵については、なお未解明の著作も多く、本論文によってその思想が完全に解明されたとは言い難く、また、著者が明恵の中心思想として指摘する人法二空説に関しても、なお検討すべき余地が大きい。しかし、従来敬遠されてきた教理的著作を正面から取り上げて分析を加え、明恵研究を大きく前進させる成果を挙げており、博士（文学）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断する。